次号予告

BOOKMARK 08 2017 SUMMER

「やっぱり( )訳!
【①翻 ②超 ③言 ④名】
(どれもはずれです)」

[ブックマーク]
2017年 春号
Take free

BOOKMARK

FREE BOOKLET [ブックマーク]

BOOKMARK

今回は、ホラーの味つけのあるミステリー特集。本当なら、巻頭の挨拶は金原瑞人さんの番なのだけれど、「ホラー、ミステリーって、もう理屈抜きで好きなので、書きようがないから！」（えーっ！？）と言われて、バトンタッチ。

でも、わたしだって負けず劣らず、ホラー＆ミステリーファンなのです。なにしろ、小学生の時の「将来の夢」はミステリー作家。何を隠そう、作品だって書きました――どこかで読んだものを借りてきた（またの名を、盗用した）密室トリック物。その頃すでに見かけなくなっていた、前方後円墳みたいな形の鍵穴と鍵を使っている時点で、才能のなさが･･･。でも、そんな鍵を登場させたのは、（盗用だったせいだけでなく）実際にそういう鍵を使っていたからなのです。当時、住んでいた家は、築 100 年くらいの古い（ぼろい）家で、物置部屋の奥からひいおじいさんの手紙や品物が出てきたり、とミステリー度満点。そして古い家とくれば、もうひとつ付きものなのが、怖い話。

――なのですが、文字数が尽きてしまったので、こちらの話はまた別の時に。では、ミステリー＆ホラーに囲まれて育ったわたしと、「理屈抜きで好き」という金原さんの「ホラー・ミステリー特集」、どうぞよろしくお願いいたします。（三辺律子）

Special Guest

「クラシックホラーファンタジーとのっぺらぼう」

恒川光太郎

Tsunekawa Koutaro

「クラシックホラーファンタジーとのっぺらぼう」

恒川光太郎

人生で初めての〈お化けの話〉は、小泉八雲の〈狢〉でした。夜道で女に声をかけると、目鼻がない化け物で、慌てて逃げた先に屋台の蕎麦屋があって……という有名すぎるあれです。再度の怪は、笑いの芸にも通じますが、小さな子供だった私は純粋に〈逃げられない展開〉が怖く、主人公は、顔のない魔物の支配する出口のない夜に囚われたと思いました。(狢が化かしたという解釈はしませんでした)

その後、暗い世界を彷徨う数多くの怪異や、魅力的なモンスターに出会ってきました。

怪異や恐怖を扱う文芸のページを開くのは、人間の好奇心と密接な関係があるようにも思います。決して開けてはいけないといわれた蔵はつい覗いてみたくなりますものね。

単なる好みかもしれませんが、和風の怪異の舞台は、文明開化と、その前後百年ほどに格別の趣きがあるように思います。着物姿の人が行き交い、水木しげる的な画に似合う田園風景や、未舗装の山道、木と紙の文化、町ではクラシックカーが走り、駅には汽車がとまる世界。

本書は「幽」という怪談文芸誌に連載された六つの短編をまとめたものです。一編が近未来、一編が外国を舞台にしていますが、残る四編は幕末、明治、大正、昭和のなかごろが舞台になったクラシックホラーファンタジーです。それにしても、泥まみれで公園や団地を駆けた私の少年時代も、とうの昔に〈現代〉ではなく昭和ノスタルジーのほうに分類されていると思うと隔世の感を禁じ得ないものです。

無貌の神というタイトルに、クトゥルー神話の神性を想起される方もいるかもしれませんが、意味的には、〈のっぺらぼう〉のほうです。出口のない夜を支配する己の怪談体験の出発点に佇むクリーチャーが設定を変えて甦ったようで、喜んでおります。

『無貌の神』
恒川光太郎
(KADOKAWA) ¥1,600+税

07_01

[*Verbrechen*]
Ferdinand von Schirach

『犯罪』
フェルディナント・フォン・シーラッハ
酒寄進一 訳
（東京創元社）
¥720＋税

「紛れもない犯罪者。ただの人、だったのに」
本書の帯の惹句が、ある意味この短篇集のすべてを物語っている。
あるとき臨界点に達する恐妻家、空き巣に入って裏社会の闇を垣間見る若者、ゴロを巻くふたりのスキンヘッドを瞬殺した身元不明の男、恋人を救うため死体を解体する若者などなど。いろんな人生があるものだ。そこにカニバリズムをめぐる猟奇殺人や、法廷相手に「能ある鷹は爪を隠す」を地で行くトンチ話なども加わり、合計十一の事件が刑事弁護士である語り手によって語られる。
文庫版序文に作者のおじが遺したという言葉がある。「物事は込み入っていることが多い。罪もそういうもののひとつだ」複雑きわまりない犯罪の顛末が抑制の効いた文章で淡々と綴られているのが本書の魅力だ。鉈で割ったような飾り気のない単文の連続。それでいて行間から万感の思いがあふれだす。いったいどんな感情に揺さぶられるか、どうぞご賞味あれ。

（酒寄進一）

07_02

[*Don't Look Now and Other Stories*]
Daphne du Maurier

『いま見てはいけない デュ・モーリア傑作集』
ダフネ・デュ・モーリア
務台夏子 訳
（東京創元社）
¥1,200＋税

家を離れ、なじみのない異国の地を訪れれば、興奮と不安とで心がざわめくものだ。この短編集では、そんな非日常のなか、さまざまな怪異と恐怖が人々を襲う。
表題作「いま見てはいけない」は、ヴェネチア旅行中の夫婦が霊能者の姉妹に出会ったことに端を発する奇怪な物語。衝撃のラストは、それまで描かれてきた不可解な出来事がその一瞬ですべてつながるという点でもみごとだ。私のお気に入りは、身分も年齢も主義主張もばらばらのイギリス人の一行がエルサレム観光に行き、それぞれ災難に見舞われる「十字架の道」。デュ・モーリアの意地の悪さ全開！と思いきや、実はこれ、結構いい話なのですよ。その他、父の最期の謎を解くためアイルランドを訪れた若い娘の恋と冒険を描く「ボーダーライン」、中年男がクレタ島での休暇中に異様な犯罪に巻き込まれる「真夜中になる前に」、人の死の瞬間にその生命エネルギーを取り出し保存するという実験を描くＳＦ「第六の力」と、それぞれ趣は異なるが、どれも物語の名手の腕が光る逸品だ。

（務台夏子）

07 _03

[*I Hunt Killers*]
Barry Lyga

『さよなら、シリアルキラー』

バリー・ライガ
満園真木 訳
（東京創元社）
¥1,200＋税

ジャズはアメリカの田舎町に暮らす17歳の高校生。親友やガールフレンドに囲まれ、明るく楽しい学園生活を送っている……とはいかないとある事情をかかえている。じつは、120人以上を殺した21世紀最悪の連続殺人鬼ビリー・デントを父に持つ彼は、幼いころより殺人の英才教育をほどこされて育ったのだ。父が逮捕され終身刑を宣告されて4年、一応は平穏な生活を送っていたジャズだが、町はずれの空き地で指を切りとられた若い女の死体が見つかる。それが連続殺人であるといち早く見抜いた彼は、父に教わった知識と技術を生かし、事件解決のため独自捜査に乗りだす……。「シリアルキラーの息子」という重い血の十字架を背負った少年の葛藤と冒険が描かれ、血なまぐさいのにナイーブで甘酸っぱいユニークな青春ミステリ。強くて聡明でかっこいいガールフレンドのコニーと、病弱でヘタレだけど友情に厚い親友のハウイーという、主人公の脇を固めるふたりのキャラクターも魅力たっぷり。続編の『殺人者たちの王』、『ラスト・ウィンター・マーダー』とあわせてどうぞ。

（満園真木）

07 _04

[*The Haunting of Hill House*]
Shirley Jackson

『丘の屋敷』

シャーリイ・ジャクスン
渡辺庸子 訳
（東京創元社）
¥760＋税

シャーリイ・ジャクスンの作風について訊かれたら、私はこう答えるだろう。「負の感情が魔を引き寄せる様を、くり返し描いた作家です」と。我欲、嫉妬、狂気、さらにはある種の犯罪行為と、彼女は様々な形で“魔”を表現したけれど、本書の場合は文字通りの“魔物”がその役を担っている。

物語の舞台は、丘の中腹に建つ古い幽霊屋敷。そこで、超常現象を解明するための宿泊調査が行われることになり、主人公のエレーナも（過去の心霊体験を買われ）調査チームに招待される。偏屈な母親の介護で青春を食いつぶし、友も仕事も恋人も、身内の情愛さえ得られぬまま三十二歳になってしまった彼女は、人生の新たな変化を求め、らしからぬ勇気を振り絞って屋敷へと旅立った。そして「旅は愛するものとの出逢いで終わる」というフレーズがくり返されるなか、彼女の心に巣食う孤独の闇と、屋敷に潜む“魔”が、ゆっくり呼応しはじめて――その先に待っていたものとは？

六十年近い時を超え、今なお読み継がれているこの古典的名作を、あなたも是非お楽しみあれ。

（渡辺庸子）

07 _05

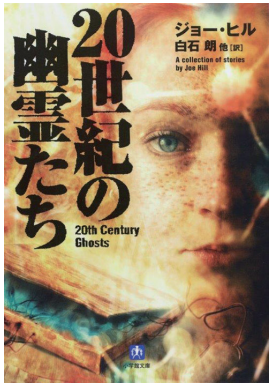
[*El secreto de Vesalio*]
Jordi Llobregat

『ヴェサリウスの秘密』
ジョルディ・ヨブレギャット
宮﨑真紀 訳
（集英社）
¥1,100＋税

19世紀末、万博開催を目前にしたバルセロナ。父の死の知らせで7年ぶりに帰郷した大学教授のダニエルは、新聞記者のフレーシャからお父さんは殺された可能性があると知らされる。地下下水道から見つかった父の手記と16世紀の解剖学者ヴェサリウスの幻の解剖書にまつわる謎、そして次々に発見される若い娘たちの惨殺死体。フレーシャと謎めいた医学生パウの協力のもと、父の死の真相の解明に乗り出したダニエルだが、その背後にはさらなる陰謀が渦巻いていた……。手記に残された暗号の謎解き、おどろおどろしい挿絵の並ぶ解剖書（ネットでご確認のほどを！）、サナトリウム、解剖学教室、カーチェイスならぬ馬車の追跡劇、地下で蠢く謎の住人〈収集人〉、そして産業革命後の光と影を宿すバルセロナの街。ミステリーでもあり、怪奇小説でもあり（じつはとあるゴシック小説にちらりと目配せもあるのだが、それは読んでのお楽しみ）、スチームパンクでもあり、でも何より冒険物語の醍醐味が味わえる小説だ。『ONE PIECE』的わくわく感をぜひご堪能ください。

（宮﨑真紀）

07 _06



[*20th Century Ghosts*]
Joe Hill

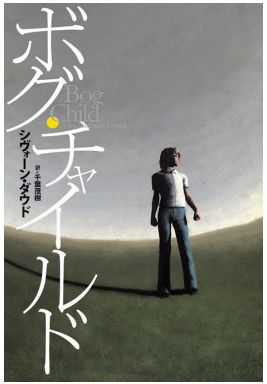
『20世紀の幽霊たち』
ジョー・ヒル
白石 朗　他 訳
（小学館）
¥933＋税

子供のころ眠りにつく前に豆電球に照らされた天井を見あげていたら、材木の木目がいつしか蠢きはじめたことはありませんか？

大人になったいまなら覚醒と眠りのあわいで見えてくるたわいもない幻だと割り切れる。でも子供のころにはまぎれもない「もうひとつの現実」が夜の天井にあった。ただの「ごっこ遊び」でも、ぼくたちは本当にスーパーマンになっていた。段ボール箱の家の扉の向こうには別世界が広がっていた。ジョー・ヒルは、ぼくたちが成長と引き換えに封印した生々しい子供の「現実」をつかのま思い起こさせてくれる稀有な作家です。もちろん、子供は夢見る大人が勝手に想像するような無垢の存在ではない。蝶の羽根や脚を無邪気にむしり、笑いながら蟻の巣に水を流しこみ、容赦ない言葉をかけあう。ヒルは幼い者の残酷さも的確に描いて読む者の胸を刺します。この短篇集のすべてがお気に召す方はいないでしょう。しかし、あなたが鍵をかけていた記憶の箱をあけてしまう作品がきっとあります。フィクションの効用として、それ以上の何があるでしょうか。

（白石 朗）

07 _07



[*Bog Child*]
Siobhan Dowd

『ボグ・チャイルド』

シヴォーン・ダウド
千葉茂樹 訳
（ゴブリン書房）
¥2,000＋税

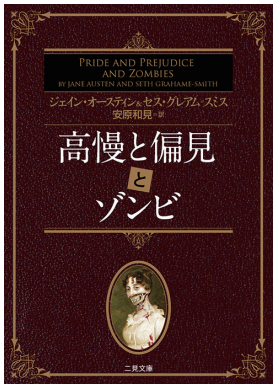
北アイルランドの国境近くに住む高校生のファーガスは、こづかい稼ぎに湿地＜ボグ＞で燃料になる泥炭を盗掘していた。しかし、そこで掘り当ててしまったのは少女の絞殺死体だった。湿地の保存作用で指紋まではっきりわかるその死体は、実は相当古いものらしい。

少女の死にまつわる謎、調査にやってきた考古学者の娘との淡い恋、イギリス本土の医大進学をめざす受験生としての焦り、信念を貫くために命を削ってハンガーストライキをしている兄への複雑な思い、そして、ひょんなことから加担させられることになった悪事に対する苦悩などなど、盛りだくさんの要素を織りこんで、ひとりの若者のひと夏を彩り豊かに描ききったすがすがしい青春小説。分厚さにたじろいだ人にも、読みはじめたらきっと後悔させません。この作品でカーネギー賞を受賞し、『怪物はささやく』の原案者としても知られる、惜しくも47歳の若さで亡くなった著者の遺作。

で、これのどこがホラーテイストのミステリ？　と思ったあなた、それは読んでのお楽しみ。

（千葉茂樹）

07 _08



[*Pride and Prejudice and Zombies*]
Jane Austen / Seth Grahame-Smith

『高慢と偏見とゾンビ』

ジェイン・オースティン／セス・グレアム＝スミス
安原和見 訳
（二見書房）
¥952＋税

『高慢と偏見』と言えば、英語圏では知らぬ人のない19世紀英国文学の一大傑作である。

田舎のいいとこのお嬢さんがロンドンからやって来たもっといいとこの美男子と恋をして結婚するという、粗筋だけ聞くとそのどこが傑作なのと言いたくなるが、驚くのはこれがほんとうに傑作だということだ。そこにゾンビを突っ込んだのが本作というわけだが、どうやってゾンビを出すのかと作品を知っている人ならだれでも首をひねるところである。しかしなにより驚くのは、これがほんとうに「高慢と偏見」と「ゾンビ」になっているということだ。８割はジェイン・オースティンの原文をそのまま持ってきて、隙あらば血みどろのゾンビ世界をもぐり込ませ、つじつま合わせに原文を少しいじってまた『高慢と偏見』の「あの人はわたしのことが好きかしら」の世界に戻ってくる。なにがマッシュアップだなめるなと言いたくなるところだが、固いことは言わず、笑って読むのが正しい姿勢というものであろう。天国のジェイン・オースティンも、きっとそのとおりと言ってくれる。はずである。

（安原和見）

07 _ 09

[*Uncle Montague's Tales of Terror*]
Chris Priestley

『モンタギューおじさんの怖い話』
クリス・プリーストリー
三辺律子 訳
（理論社）
¥1,600＋税

わたしの怖い話好きは、父のベッドタイム・ストーリーから始まったような気がする。『猿の手』、『新しい地下墓地』、『ガウェイン卿と緑の騎士（怖さ増しバージョン）』……父親が寝る前の子どもにする話か？と思うし、実際、わたしと弟二人は布団の中で震えながら聴いていたのだけど、でも、なぜかその時間が楽しみだった。

この本の作者プリーストリーも、子どもの頃からジェイムズの幽霊話やポーの恐怖小説に夢中になり、ついには自ら怖い話をかいてしまったという人物。妙に生々しい人形、絵の入っていない額縁、悪魔の絵の版画――主人公のエドガー少年は恐ろしいとわかっていながらも、モンタギューおじさんの書斎にあるいわくありげな品々にまつわる話をせがんでしまう（その気持ち、わかる！）。話を聴くにつれ、森の中にぽつんと立つおじさんの屋敷のぶきみさも気になってくる。そして、最後はとうとうおじさん自身の秘密が明らかに……！　怖さに病みつきになった方には、『船乗りサッカレーの怖い話』『トンネルに消えた女の怖い話』もぜひ。

（三辺律子）

07 _ 10

[*The Last Child*]
John Hart

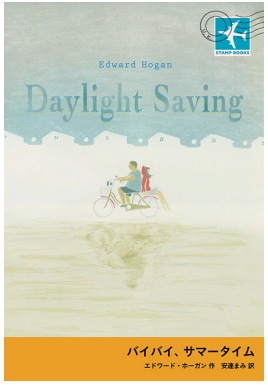
『ラスト・チャイルド』
ジョン・ハート
東野さやか 訳
（早川書房）
上・下 各 ¥800＋税

『ラスト・チャイルド』で描かれるのは、十二歳の少女の失踪事件をきっかけに壊れてしまった家族だ。父親は行方をくらまし、母親は悲しみと怒りを薬物で癒やすことしかできなくなっている。母も警察も少女の生存を絶望視するいっぽう、ふたごの兄であるジョニーだけは、どこかできっと生きていると信じて妹捜しに明け暮れる。それも、妹が見つかりさえすれば家族がもとどおりになるという一途な思いゆえ。

神の声が聞こえるという体重三百ポンドの大男の存在が不気味な影を落とすなか、事件はしだいに連続殺人の様相を呈していく。家族の物語と少年の成長と謎解きとがみごとに調和していて、この絶妙なバランスがハートの最高傑作と思うゆえん。黒人奴隷とその解放の歴史や信仰の話も無理なく盛りこまれ、物語にいっそうの深みをあたえている。そして小さいながらも希望の光を灯してくれる秀逸なラスト。最後の一文で読者もきっと救われた気持ちになれるはず。

（東野さやか）

07 _ 11



[*Daylight Saving*]
Edward Hogan

『バイバイ、サマータイム』
エドワード・ホーガン
安達まみ 訳
（岩波書店）
¥1,700＋税

やや内向きな少年ダニエルは、原生林に築かれた安っぽいスポーツリゾートで、道の真ん中に立つ、水着姿の少女を見かける。離婚にやさぐれた父親とすごす１週間の休暇。家庭でも学校でもいまひとつのダニエルは、やさしくユーモアのセンス抜群の少女レキシ―に惹かれていく。でも、新しい友達には不可解な点があった。腕時計が逆に時を刻んでいる。髪からいつも水が滴っている。会うたびに、身体の傷が増えている。それに、「心の目」にしか映らないらしい。

イギリスでは、10月の最終日曜日の午前２時になると、時計が１時間戻り、夏時間（サマータイム）から冬時間に切り替わる。そのどこにも属さない、わずかな狭間の「時」に、いかなる贖いや赦しが秘められているのか。仮装パーティの夜、ダニエルは傷つき苦しむ魂を、ぐるぐる繰り返される「世界史の輪っか」から救い出せるのか。猟奇的な事件を核に据えながら、りりしい少女とがんばる弟分の少年が精いっぱい、心を通わせあう。でも、未来を変えた瞬間、人魚姫は水底の住まいに戻り、ふたりは永遠に別れることに。サスペンス仕立ての異色ロマンス。

（安達まみ）

07 _ 12

[*An Awkward Age*]
Anna Starobinets

『むずかしい年ごろ』
アンナ・スタロビネツ
沼野恭子／北川和美 訳
（河出書房新社）
¥2,200＋税

利発だった幼い息子がしだいに可愛げのない陰気な少年になり、やがて手のつけられない存在に変貌していく。そういうことは思春期の子にありがちかもしれない。タイトルの「むずかしい年ごろ」は、ロシア語の原題だと「Ｐｅｒｅｘｏｄｎｙｊ ｖｏｚｒａｓｔ（過渡的な年齢）」で、じつは「思春期」と訳すこともできる言いまわしである。だれもが体験するかもしれない日常性のなかにふと芽生える理不尽ほど恐ろしいものはない。息子はいったいどうしてモンスターのような存在になってしまったのか。そこにはアリとの共生という身も凍るようなドラマがあるのだが、母は知りようもなかった……。訳者として面白かったのは、この表題作の文体である。マクシム少年の日記に「子供の成長」と「人間の破壊」という本来だったら相容れないはずの相反する動きが共存し、さらに女王アリの語りが混入しているうえ、図鑑の無機質な文章も挿入されている。読者の皆さまにはこの重層的な語りを楽しんでいただければと思う。全部で８編の作品が収められているが、個人的には「ヤーシャの永遠」がいちばん怖いと思う。

（沼野恭子）

07 _ 13

[*La débutante*]

『最初の舞踏会 ホラー短編集３』

平岡 敦 編訳
（岩波書店）
¥720＋税

怪談にもお国柄があるようだ。幽霊の本場イギリスの怪奇小説は、摩訶不思議な現象や得体のしれない出来事をただそのままに描いて、それがなんとも言えず怖い。いっぽう理性の国フランスでは、怪異にも理屈をつけないと気がすまないらしい。例えば本書に収めたアポリネールの『消えたオノレ・シュブラック』とエーメの『壁抜け男』。どちらも壁に入りこむ超能力を持った男の話だが、前者では動物の「擬態現象」のようなもの、後者では「甲状腺の括約内膜が螺旋状に硬化しているから」と奇怪至極な説明がなされている。怪談というより奇譚と呼ぶのがふさわしいかもしれないが、そんなフランスのホラー風法螺話の数々を楽しんでいただけるはずだ。男女の愛憎が絡んでいる作品が多いのも特徴で、ゾラの「恋愛結婚」など、なまじの幽霊より人間の情念のほうがずっと怖いと思い知らされる。それから、このインパクトある表紙。表題作のカリントン「最初の舞踏会」から取っている。いったいどんな話か気になるだろうけど、まさにそのまんま。ぜひ読んでみてください。

（平岡 敦）

07 _ 14

[*Miss Peregrine's Home for Peculiar Children*]
Ransom Riggs

『ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち』

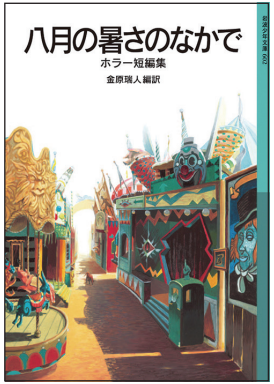
ランサム・リグズ
金原瑞人／大谷真弓 訳
（潮出版社）
上・下 各 ¥680＋税

おじいちゃんっ子だったジェイコブは、祖父から孤児院の奇妙な子どもたちの話を聞いて育った。空中浮揚の少女や透明人間など、特別な力を持つ子どもたちが怪物から隠れて暮らしていたという。彼らの古い写真まで見せられたジェイコブは、その話を完全に信じていたが、16歳になる頃にはさすがにインチキだと思っていた。ところが突然、祖父が怪物に襲われて亡くなってしまう。祖父の死の謎を解くため、祖父の育った孤児院を訪ねたジェイコブは、古い写真に写っていた子どもたちがそのままの年齢で生きているのを発見する——。

不思議なタイトルに、物語に散りばめられた44枚の古い写真。それだけでも強烈に興味を引かれるが、内容も負けていない。最初は現代物のＹＡなのに、途中から一気にダークファンタジーに変わっていく。その転換点はこちらの認識がねじれるような感覚に襲われる。ちなみに著者は『シャッター ミー』の著者の夫。夫婦それぞれのダークファンタジーを読み比べるのも、お勧めです。

（大谷真弓）

07 _ 15



[*August Heat*]

『八月の暑さのなかで　ホラー短編集』

金原瑞人 編訳
（岩波書店）
¥680＋税

中高生、いや小学生の頃から怖い話や小説が好きだった。大学を出て、大学院に入って、大学で教え始めても、好きだった。浪人生の頃に『エクソシスト』を観てからは、怖い映画も好きになった。恐怖小説、恐怖映画に関してはかなり読んだり観たりしている。そして翻訳を始めた。となると、自分なりの恐怖短編集を編みたくなるのは当然だ。その念願がかなって、岩波少年文庫で出してもらえることになった。19世紀から20世紀に書かれたもののなかから選ぼうと思ってリストを作ってみたら、すごい量になってしまったので、必死に削って、さらに削って、最後に残ったのがこの1冊にまとまっている。サキ、ダール、ティンパリなどの有名な短編から、ダンセイニ、フレドリック・ブラウンのちょっと珍しいもの、さらにはポーのほとんど有名でない短編の翻案などなど、盛りだくさんの内容。怖くてクールな13編。訳していて、一番、心に響いたのは、このなかで最も地味なレノックス・ロビンスンの「顔」でした。

（金原瑞人）

07 _ 16

[*The Bird's Nest*]
Shirley Jackson

『鳥の巣』

シャーリイ・ジャクスン
北川依子 訳
（国書刊行会）
¥2,400＋税

エリザベスは地味で内気な23歳。博物館で事務の仕事をしながら単調きわまりない毎日を送っていた。ところが、その博物館の土台が傾ぎだす。ある朝出勤すると、補修のため机のすぐ横の壁が取っ払われ、大きな穴がぽっかり口を開けていた。同じ日、エリザベス宛に奇妙な匿名の手紙が届く。やがて彼女の精神は変調を来しはじめて……。1954年出版。ダニエル・キイスの『24人のビリー・ミリガン』等が話題をさらった時代より20年以上も前に書かれ、多重人格小説の先駆けとなった傑作だ。

ジャクスンは昨年生誕100周年を迎え、再評価に弾みがついた。『丘の屋敷』に代表されるとおり、怖い、不気味という印象が強いものの、本書にはコミカルな要素もふんだんに盛りこまれている。冒頭から思わず物語に引きこまれ、独特の黒い笑いを堪能しつつテンポのよい語りに身を任せれば、ひと息に結末に到達することだろう。読後、足下のぐらつく危うげな感覚がいつまでも消えずに残る。自分の輪郭がじわじわと滲んでいき、異物がぬっと侵入してくる恐怖。一度読んだら病みつきになる作家である。

（北川依子）

Pick Up Creator

スガ ミカ
Suga Mica
https://www.instagram.com/micapower/
http://www.tis-home.com/mica-suga

「シャイニング」

BOOKMARK 07

［ブックマーク］ 2017 SPRING

２０１７年３月 発行
印刷：グラフィック

URL：kanehara.jp/bookmark/
Twitter：@bookmarkFB
Facebook：facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行
金原瑞人（法政大学教授・翻訳家）

巻頭の挨拶、順番からいくとぼくの担当なんだけど、三辺さんに代わってもらいました。ホラー、ミステリって、もう理屈抜きで好きなので、書きようがないからです。「聞かないで！」って感じ。

編集
三辺律子（英米文学翻訳家）

今回のラインナップを改めて眺めると、世の中には恐ろしいことや変なことを考えつく人がたくさんいるんだなあと思う。そして、たくさんいてよかった、ってちょっと安心する。これからも、そういう人がどんどん作家になってくれますように。

イラスト・ブックデザイン
オザワミカ（イラストレーターとかいろいろ）

ホラーミステリーはもっぱら日本文学ばかりを読んでいましたが、これは読みました。『羊たちの沈黙』（トマス・ハリス）。すっかりハマって、プロファイラー関連のノンフィクションばかり読んだ 20 代。

協力
宮坂宏美　田中亜希子　中村久里子